

部族の語りとポストモダニズムが出会う場所 —Erdrich作品におけるハイブリディティー—

徳 永 紀美子

序

ルイーザ・アードリック (Louise Erdrich, 1954-) は、1980年代に入って活躍を始め、今ではネイティブ・アメリカン・ルネサンスの第2波の代表的作家として広く認知されている。彼女やジェラルド・ヴィゼナー (Gerald Vizenor)、あるいは90年代になって頭角を現したシャーマン・アレクシー (Sherman Alexie) のような作家たち¹と第1波の代表的作家たち (N. Scott Momaday, Leslie Marmon Silko など) との間には、通底する部分がありながらも断層が生じていて、現代北米先住民文学と称しても一枚岩ではないようにみえる。²その差異をもたらしているものが、実はポストモダンな感受性や思考なのではないかという想定のもと、本稿は、アメリカ文学におけるアードリックのマッピングを試みる。つまり、彼女の作品では、先住民性は、ポストモダンな人間観や小説にまつわるポストモダンな言説と分かちがたく混淆しているということを検証し、それによって生じる文学作品創造上の可能性に言及したい。

I. アードリックの特色とシルコウによる批判

アードリック作品は、20世紀初頭から現代までを主な時代背景として、保留地やその近隣の町で生きる人々の姿を描いている。作品への批評には、大別して2つの観点があるように思われる。一つは、アメリカ先住民の伝統的な部族物語りの要素についてであり (Chavkin, Jacobs, Sarris など)、片方は、ユーロアメリカン中心の主流文学で言うポストモダンの要素についてである (Quennet, Rosenthal, Scott など)。

先住民の語りは、オーラル・トラディション、サヴァイヴァル・ユーモア、循環的時間の概念、部族神話を基盤とする点で共通しているが、彼女の作品でもこの特徴は非部族的要素と混じりながらも語りの土台となっている (Chavkin, *Conversations* 4)。その一方、現代アメリカ人作家という点では、自

己形成の背景としての教育やポストモダンな社会状況の影響、また文学的影響としてはマイケル・ドリス (Michael Dorris) を別にすると、ウィリアム・フォークナー (William Faulkner) やポストモダン系作家、その他にも女性作家や南米、ヨーロッパの作家に至る多様な作家から大きな影響を受けていると自身が語っている (Chavkin, *Conversations* 38, 68)。

ポストモダニズムにおける人間観とは、大きな物語への信奉が崩壊した結果、人間中心主義の主体概念が、それが本来的に内包する従属性に着目されるようになり、すべてが社会的に構築されるという脱構築の果てに西洋的知がたどり着いた眼差しといえるだろう。それに対して、先住民の世界観では、元来、人間、特にその理性や自我は中心的位置に存在していない。彼らは、自然の調和的、循環的力の中で、フリッチョフ・カプラ (Fritjof Capra) の表現を借りれば「ホリスティック (wholistic)」な世界観を有していた。人間を自然の一部に過ぎないとする先住民の人間観には、西洋的な主体概念は存在しないのである。

ところが、植民地化されたことにより、彼らは、アイデンティティの構築性を最も痛感するエスニシティ・グループになることを余儀なくされた。そのとき、アイデンティティ探求がサバイバルのために大問題となる先住民の意識と、人間中心主義への省察から主体やアイデンティティの相対化に至った西欧的自己探求の問題は、常に人間を描き続けるアードリックの作品において重なりをみせるのである。現代先住民文学の中心テーマのひとつである自己探求は、西洋的主体概念が崩壊したポストモダンの現状だからこそ、アードリックのテキスト内でアイデンティティの構築性と複数性という問題意識として万人共通のテーマと化す。つまり、出自は異なり、歴然とした差異はあるものの、この二つの世界観は、現代という時点、アメリカという空間で混じり合い、アードリック作品は、人間の存在様態への強い関心においてエスニシティの垣根を越えるのだ。

異なる世界観における共通の状況を考える上では、更に、アメリカ先住民文学が表現媒体として、征服者の言語である英語を使用することについても考察が必要である。言語論的展開の帰結である、言語を共有することは世界観を共有することという認識を前提とすれば、英語で書かれる現代アメリカ先住民文学では、作品中の伝統的先住民性はアメリカ的価値観を反映する英語という言語に翻訳されることになる。ルイス・オーウェンズ (Louis Owens) は、その混淆状態が生み出された過程と現状を次のように述べている。

We do not have the luxury of simply opting out, because whether or not we

are heard by Said, Sollors, or others, we already function within the dominant discourse. To think otherwise is naïve at best, for the choice was made for us generations ago. Half an millennium of European attempts to both eliminate and reimagine the Indian has resulted in a hybridised, multicultural reality clearly recognized in fiction as long as the 1920s and '30s. . . . The very act of appropriating the colonizer's discourse and making it one's own is obviously collaborative and conjunctural. (*Mixedblood Messages* 52)

同様に、エルヴィラ・ピュリターノ (Elvira Pulitano) も “How could a Native American theory aim at a ‘pure’ form of (Native) discourse, untouched by the strategies of Western tradition, when Native American literature itself is a product of a crosscultural encounter, what Thomas King labels ‘interfusional literature, blending the oral and written’ (xii) ?” (9) と、アメリカ先住民の言説が言語文化的に無傷であることが不可能だということを指摘している。こうして現代アメリカ先住民文学においても、ユーロアメリカンとアメリカ先住民という二つの異なる世界観は、互いの影響力と緊張関係を孕みながらテキスト内で混淆することになるのだ。

また、英語というフィルターを通してのみ先住民性は伝達されるわけであるが、その一方で、植民者の言語である英語の使用は、必ずしも文化的屈服ではなく、逆に汎インディアン性の獲得を容易にし、また、他の部族、他の人種という広範な読者の獲得を可能にするために、物語は普遍的な体験として共有されるのである。

このような条件から、アードリックの語りは、ヘンリー・ルイス・ゲイツ Jr. (Henry Louis Gates, Jr.) がいう “double-voiced text” あるいは、“heteroglossia” (異種注解の混在している書記法) になっているといえる。この点は後程詳細に見るが、そのようなアードリックのテキストに対して、レスリー・シルコウ (Leslie Marmon Silko) は、アードリックの第2作『ビート・クイーン (*The Beet Queen*, 1987)』の書評において、アードリックの言語実験的要素を冷やかに評している。

Erdrich's prose is an outgrowth of academic, post-modern, so-called experimental influences. The idea is to “set language free,” to allow words to interact like magic chemicals in a word sorcerer's pristine laboratory, where a word and its possible relationships with other words may be seen “as they really are, in and of themselves” without the tiresome interference of any historical, political or cultural connections the words may have had in

the past. . . Self-referential writing has an ethereal clarity and shimmering beauty because no history or politics intrudes to muddy the well of pure necessity contained within language itself. (Silko 179)

彼女は、アードリックの文体を「詩人による散文」(178)と評した後、それをアカデミックで、ポストモダンな実験性の所産であると述べる。シルコウによれば、アードリックは、言語に付随するはずの歴史・政治・文化的関係性を排除した言語実験を行っているに過ぎないのだ。その結果『ビート・クイーン』には先住民の共同体体験が欠如し、時や場所の感覚が希薄で、保留地と先住民の描き方が不正確である上に、人種差別を歴史や政治の問題として見ないまま、単に個人、あるいは人間関係の問題にすり替えている、と不満を表明した(180-81)。

彼女の指摘が的確な点は、アードリックが複雑な人間関係と個人の内面に焦点を当て、その描写が詩的で幻想的であった点である。しかし、この点でさえも、シルコウはこれをアードリックの作家としての限界とみている。

一方、この批判の問題点は、この作品では登場人物がユーロアメリカン中心になっていることをシルコウが見落とし、白人の登場人物を混血インディアンと取り違えたり、エスニシティが不明だと論じて、その結果、アードリックの人種に関する認識や時代性と場所の感覚が非現実的であったことである。確かにアードリック作品の人間関係は複雑だが、シルコウはアードリックが先住民の血を引いているから、当然、登場人物は先住民が中心であるという先入観で読んでいる。また、彼女の批判は先住民の血を引く作家はすべからず先住民性を前面に押し出すべきであるという彼女自身の創作上の信条に由来しているようにさえ思える。

アードリックは、ほかの作品でも、『ビート・クイーン』で取り上げた、主にユーロアメリカンの人々を中心としたサーガを書き続けている。これは、『ラヴ・メディスン』で登場した先住民の人々とも「生きている場所」を媒体として関係を持つ物語であり、アードリックの物語群全体が共同して、彼女の小説空間を形成している。フォークナーがヨクナパトーフアを創造したように、アードリックは、多くの(混血)先住民やユーロアメリカンの登場人物を満遍なく描くことでエスニシティを更に複雑化し、時間枠もより長くしたノースダコタ連作を増殖させて1つの文学的地勢図を作り上げているのだと言えよう。アードリック自身もインタビューで、“And the four books are about a region, a small area.” (Chavkin, *Conversations* 32)と述べているし、共同執筆者のドリスの発言は、彼女の発言を更に具体的に説明している。

According to Dorris, “*Love Medicine* focuses on the community and not on the conflict between Indians and non-Indians. It’s sort of out there on the periphery. We [he and Erdrich] decided to focus everything on the community in order to remind people that in the daily lives of contemporary Indian people, the important thing is relationships, and family and history, as it is in everybody’s life, and not these sort of larger political questions, although they do impinge.” (Chavkin, *Conversations* 7)

つまり、彼女の作品は、先住民の共同体だけでなく、先住民と非先住民の両方の生に焦点を当てた、「地域」についての語りと取るべきなのである。

また、シルコウが指摘した歴史性、政治性の問題に関してみると、まず歴史性については、多くの批評家が、アードリック作品における史実の正確な使用を彼女の特色のひとつとしてあげていることを考慮すれば、³それだけでも反証となるだろう。彼女は、大人を対象とした小説だけでなく、いわゆる児童向けの小説においてさえ、史実を正確に使用し、先住民の物語を語ることで「正史」の再考を促すのである。

政治性に関しては、アードリックへの非難が正しいかどうかではなく、むしろ作家としての二人の関心事の違いが明確になるといえよう。

チャールズ・ラーソン (Charles Larson) は、*American Indian Fiction* (1978) の中で、サイモン・ポカゴン (Simon Pokagon) からシルコウまでを4つの政治的タイプに分類している。ユーロアメリカンへの同化派 (assimilationists)、ラディカルな伝統的インディアン主義の復古派 (reactionaries)、修正派 (revisionists)、白人と先住民の分離を主張する分離派 (separatists)、の4つである (10, 97, 170)。その中で彼は、ママデイを復古派、シルコウを分離派と見ている。つまりネイティヴ・アメリカン・ルネサンスの代表的第一世代作家は作品を通して、伝統的先住民性を強調し、文化的伝統復活と共同体回帰によって現代先住民の文化的アイデンティティの安定とサバイバルを試みているといえるのだ。そこでは、エスニシティと小説の主題は本質主義的発想で捉えられる傾向にあり、先住民の伝統文化が特権化され、白人による征服・抑圧の歴史を前景化することできわめて政治性が高いメッセージが生み出される。もちろん、彼らの作品自体が、文学的に優れているからこそ高く評価され、現代先住民文学とその基礎にある口承文学の伝統や先住民の世界観、不可視化され続けた歴史への関心が高まったことは言うまでもない。しかし、分離派的立場のシルコウにとっては、『ビート・クイーン』の内容は、登場人物のエスニシティを彼女が誤読したことと相まって、容認できない同化主義に映ったに違いない。

このシルコウとアードリックの違いは、育った環境も多少影響しているかもしれない。シルコウは、混血とはいえ、伝統文化を保持することに政治・経済上で比較的的成功したラグナ・プエブロ族の保留地で育っている。一方、アードリックは、先住民の伝統に慣れ親しみながらも保留地に隣接する町でさまざまな人種が混在する中で成長している。先住民の血を引く現代作家として、“Contemporary Native American writers have therefore a task quite different from that of other writers I’ve mentioned. In the light of enormous loss, they must tell the stories of contemporary survivors while protecting and celebrating the cores of cultures left in the wake of the catastrophe.” (Wong 48) と、先住民の歴史と社会的問題に対し文学上の大きな責任を自覚しながらも、自身の小説における関心は、前述したように、地域の中で人々がそれぞれの人種的・歴史的・社会的背景を背負いつつどのように生きていくか、に向けられている。その意味で、アードリックは、文学作品創作上の題材を第一波の作家たちよりもより広い場の中に求めていると言えよう。

更に、作品の政治性に関してアードリックは、小説の焦点が何であれ、政治的問題を強調しなくても、人間を十全に描いた芸術作品であれば、その背景にある政治性はおのずと効力を発揮する、と考えている。インタビューにおいても、“Any human story is a political story.” (Chavkin, *Conversations* 238)、と人間の生が政治と切り離せないという見解を示しながらも、一方では、“‘If art is one’s first concern,’ she says, ‘whatever politics are behind it will be effective. The art comes first. Otherwise, nobody’s going to read it.’” (Chavkin, *Conversations* 80)、と芸術性を優先させる姿勢を示している。

このような点を考慮すると、シルコウの批判の核が何であれ、アードリックの小説空間の広がりや新たな読者獲得を容易にし、先住民世界をより多くの非先住民読者に共有させたことに疑う余地はない。

また、アードリックの文体に関しての批判では、シルコウは、ほとんど故意に「ポストモダン」の定義を狭義に限定し、ポストモダン小説が攻撃されるとき「言語、思弁の遊戯、生の人間が描けていない不毛さ」という常套句を利用しているとしか見えない。しかし実際には、アードリック作品にはポストモダン小説の特徴であるメタフィクショナル的要素やパステーションといった手法はあまり見受けられない。彼女の作品にみられるポストモダンな要素とは、むしろ、テーマとしてのアイデンティティの構築性や西洋文学が語りの概念や技巧において着目するようになったいくつかの要素、つまり、作者の死、多声の語り、間テクスト性、マジックリアリズムなどにある。それらは、実は部族物語の伝統にそもそも存在している。それにもかかわらずシルコウは、アードリックが表現を彫琢するという1点を根拠として、それ

をポストモダン小説の実験性と同一視している。

しかしながら、そのような半ば意図的誤読にもアードリック作品の核心に繋がる指摘がなされている。それを受け、ヴィゼナーは、シルコウの書評に見られる、彼女の言語にまつわる解釈を的確に読み解き、更にアードリックの特質にも言及している。

The postmodern condition, however, is not literature on trial but a liberation of tribal stories. Silko is precise in one sense, that postmodern attention would “set language free,” but she misleads the reader by saying that postmodern “writing reflects the isolation and alienation of the individual who shares nothing in common with other human being but language and its hyg[i]enic grammatical mechanisms.” Erdrich is a polished writer and she could be called hygienic, an unusual postmodern metaphor on grammar, but not in the sense that is implied in the review. (xii)

ヴィゼナーの指摘の通り、ポストモダンな言語への関心は、言語や部族物語を解放する。それによって、アードリックの詩的なテキストは単一の意味への還元不可能な多義性を獲得しているのだ。

アードリックの語り、heteroglossia、あるいは「2重声のテキスト」になっていることはすでに述べたが、アードリックの語りは、まず先住民文化コードの中で機能する声、それからユーロアメリカンを中心とする非先住民の文化コード内で機能する声、さらにはその両方を聴き取る聴衆に対しては同時に二重に機能する声、となる。テキストが二重声になる可能性を持つのは、次の四つの場合—— “1) it can be addressed to a double audience; 2) it can have double literary ancestors or contain double styles; 3) it can both repeat and revise previous motifs within its tradition; 4) it can contain a double message.” (Childers 89) ——と考えられる。アードリックの語りは、実際、このすべてに当てはまっている。さらにエレイン・ショウォルター (Elain Showalter) がしばしば指摘する「女性作家のテキストが生む二重性」をも考慮に入れると、アードリックのテキストは、まさに「多重の言説」として読まれることが可能になるのである。

次章では、この多義性に関して、部族物語の伝統と西洋的小説にまつわるポストモダンな言説が、分かちがたく混交して多義的なテキストを作り出している様を『ラブ・メディソン』を例に見ていく。⁴

II. テキストにおける多義性

『ラブ・メディスン』は、チペワ族の混血女性であるジューンがノースダコタの町で、保留地へ向かうバスを待つ間バーで時間をつぶすところから始まる。時は、復活祭目前のある午前中である。ジューンの極度の空腹感は、長年にわたる先住民の肉体的・精神的飢餓を表すとも言えるし、女性全般の、もしくは現代人としての空虚感であるかもしれない。あるいは、個人的なアイデンティティへの渴望とも取る事ができる。実際には、その全部の組合せが可能になっているのだ。その飢えや不安は、象徴として使用されるイースターエッグ、水、蛇などが、異なる文化コードで同時に働くことで、重層的に立ち上がってくる。程なくジューンは、白人男性の車にのり込むが、結局は保留地へ続く雪原を徒歩で戻る決心をする。第1章の第1節の終わり、彼女は40年ぶりの大雪をものともせず、故郷へ向かい、「湖水のような雪原を渡り、帰郷した」(7)と結ばれる。しかし、直後の第二節では、実は吹雪の中で彼女が凍死したことが明かされる。自殺か事故死かという彼女の死の謎と曖昧な帰還の意味は、テキストに「空白」を生じさせ、多様な解釈を可能にする。一種の枠物語となるこの部分における全知の語りは、キリストの復活や水上を歩くという奇跡のイメージを巧みに利用しながら、彼女の実際の死を復活に繋がる奇跡に読み替え可能にするのである。

ジューンは雪原という、書き込み可能な空所をテキストに残し、彼女の死がもたらす登場人物としての不在は、残された人々がその空白をさまざまな1人称の語りによって埋めることでジューンを現前させている。それは同時に、コミュニティの人々をも表出し、作品は個人の物語でもあれば、共同体についての物語にもなる。この多声を響かせるナラティブ形式は、誰もが平等に語るという先住民のストーリーテリングの典型である。その一方で、同時にミハイル・バフチン (Mikhail Bakhtin) がいう、「対話的、ポリフォニックな」テキストの典型ともいえるのだ。

更にバフチンの理論に関する点は、先住民神話や民話に登場するトリックスターの存在と彼らが発動するカオスや笑いが、アードリックのテキストで重要な役割を果たしていることである。トリックスターは、人間にも動物にも変化自在な超自然的存在で、権力を出し抜き転覆を試み、そのカーニヴァレスクな活力が周縁部から脱中心化を起こすという意味でポストモダン小説におけるマジックリアリズムと同様の機能を果たす。

南米に起源を持つマジックリアリズムと北米のそれは完全に同質というわけではないものの、両者は土俗的想像力において通低している。アードリック作品でもこの要素は北米先住民神話を土台として、トリックスター的登場人物や超自然現象、言葉の呪術的力などに見ることができる。しかし、彼女を含む先住民系作家にとっては、メインストリームの批評で使用される「マ

ジック」や「マジカル」という形容は、ことさらマジカルな要素でないことは着目すべきだと思われる。アードリックは、マジカル・リアリズムと口承文学の伝統について、“So what may appear to other non-Indians as magical realism or art is in fact the style of people who are primary oral, and who are part of an oral rather than a literate culture that values creating stories and dialogue and ideas—making stories out of things.” (Chavkin, *Conversations* 203) と述べている。更に、彼女自身から見た自己のマジカル・リアリズム的な要素については以下のように語っている。

Interviewer : “Joyce Carol Oates calls you a ‘magical realist.’ Do you see yourself as one?”

Eerdich: “That must have been a while ago, and it was very good of her, a great compliment, but I think now that rage to imitate Marquez has declined. Probably your word unpredictable is more accurate. It is certainly the reaction I’d like. The thing is, the events people pick out as magical don’t seem unreal to me. Unusual, yes, but I was raised believing in miracles and hearing of true events that may seem unbelievable.” (Chavkin, *Conversations* 221)

以上の二例に示したように非先住民には信じがたい「魔法」に見えても、口承伝統と部族の神話を持つ先住民には「意外であっても非現実的ではない」ことなのだ。彼らの世界では、複数の層が同時に存在する様態こそが現実であるために、非先住民にとっての「魔法」は、先住民にとっては現実の別の層が越境してきたことを示しているに過ぎない。

しかし、原則がそうであっても、アードリックのマジカル・リアリズム的要素は、ファビエンヌ・クウェネット (Fabienne Quennet) が、“Although Erdrich’s use of the devices of magical realism is often grounded in the rewriting of Native American myths and folk stories, not all of her magic elements can be explained by her ethnic background.” (88、下線論者) と示唆するように、単に先住民的要素の現れというだけではないだろう。アードリックがポストモダン文学におけるマジカル・リアリズムの効果を熟知しているが故に、その効果を利用し意図的に特定の試みを行っていると推測することができる。クウェネットは、アードリック作品におけるマジカル・リアリズム的要素の機能を次のように解釈している。

Introducing apparently supernatural or fantastic events into a realistic setting

is a means to present a new reality as seen by the Chippewas. Myth and magic are woven deeply into fabric of everyday life, pointing towards the construction of alternative (literary) worlds, offering multiple meanings and potential for a “double or multiple vision” (Kolmar 237). (91)

すなわち、アードリックは、ナラティヴの現実的な世界に非先住民にとってのマジカルな要素を入れ込むことで、部族民からみた別の現実を提示し、多重のヴィジョンを示すことで「オルタナティヴな（文学的）世界の構築」へと読者の視線を向けるのである。その意味では、書き手であるアードリックこそが、トリックスターであると言えるのかもしれない。

次に、その作者に関する問題と間テキスト性について見る。「作者の死」、「間テキスト性」、テキストの意味生成における読者の役割は、周知の通り、そもそも言語やテキストをどう見るか、から派生する問題である。ジュリア・クリステヴァ (Julia Kristeva) の「あらゆるテキストは他のテキストの吸収や変形である」(37) やロラン・バルト (Roland Barthes) の「テキストとは、無数にある文化の中心からやって来た引用の織物である」(85-86) という見解は、言語の意味レベルではなく、文学作品の具体的な効果として、アードリックの創作法や自身の作品間の相互依存性と結びつく。その実体を以下で、より具体的に見て行く。

「作者の死」は今では聞きなれた概念だが、アードリックは、夫であったマイケル・ドリスとの共同制作を通して、実態としての作者にも特権的なオリジナリティーを持たせない小説作成の方法を実践した。そのやり方は、むしろ部族の誰もが語るストーリー・サイク的な物語の成り立ちを持つ。つまり、主人は、作者ではなく、物語なのである。アードリックの創作においては、古典的な作者の概念は実質的に葬られ、ナラティヴは小文字の作者たちに常にプロセスとして共有される。その結果、ストーリーは生き物のように、多義的で変化の可能性をいつも秘めるものになるのだ。彼女自身の発言—— “I have not revised previously published work, but I do add to it, as stories or additional scenes occur. There is no reason to think of publication as a final process. I think of it as temporary storage.” (Chavkin, *Conversations* 231-32) や、“I don’t think of the books as definitive, finished, or correct, and leave them for the reader to experience.” (Chavkin, *Conversations* 247) ——に見られるように、彼女にとってストーリーの変容性は、作品の出版状況にさえ影響を受けることなく、自由で、制限されてはならないものなのである。

また、その変化するナラティヴは、個々の作品間の強力な依存関係、つまり間テキスト性を有している。アードリックのテキスト自体が単独で、彼女

の作品以外のテキストと絡み合って相互依存関係を持っているのはもちろんだが、彼女の作品一つ一つが、アードリックが書き続けている、ある大きな物語の一部であるかのように関連しあっているのだ。すなわち、彼女の作品、或いは作品群にあっては、ある登場人物によってすでに語られた物語についても、異なる登場人物（たち）の視点から語られる機会が与えられ、いわゆる「多声の語り」によって、過去や現在が再提示される。その結果、物語の意味づけは、さらなる多義性を持つ。また、同じ登場人物が別の作品にもしばしば登場する。それによって、一作品だけで知るよりもより長いスパンで彼らの人生や時代が読者の眼前に立ち上がってくる。このように個別の作品が、作品群になると、文字化されていない更に大きな作品を読者に想像/創造させることができるのである。これは、作品群内の間テキスト性のなせる業といえよう。彼女の作品群は、程度の差はあるものの、どこかですべてが繋がる仕組みになっている。その様は、一枚のキルトが個々の模様を持ちながらも増殖することで全体が新たな模様を描くかのようなものである。

結論

以上見てきたようにアードリックのテキストは、起源が異なる二つの文化コード、二つのナラティブ形式にテキスト上の現象としてまたがっていることは明白である。ところが、その混淆したナラティブから先住民の歴史や政治性が滲み出る時、神話を生きてきた先住民の文化と、植民以来、新たな神話を築こうとしてきた白人の文化との起源的差異が見えてくるのだ。その結果、そこに抽出されたアメリカというテキスト自体が宙づりにされるのではないだろうか。80年代以降、ポストモダンな状況に自覚的である彼女のような作家たちにより、特定の部族物語は、その核を保持し攪乱性を内包しながらも、解放、拡張され、越境性と混淆性を有するナラティブが生みだされている。そしてそれは、アレクシーのような次世代の作家によって継承されつつ更なる変化を見せているのだ。

アードリックは、自らの主流文化的側面と周縁性の混淆状態を自覚し、かつ利用しつつ、周縁部におかれた文化的アイデンティティにより重きを置いて物語を紡ぎ出す。創作上のこのバランスと非先住民の物語を排除しないという姿勢、それに部族物語とポストモダンな実験性を持つ共通性こそが、彼女の作品が広範な非先住民の読者にも受け入れられた主因なのではないだろうか。

主流と認知されることが作家の真の価値と同じであるかどうかは別にして、アードリック作品は、単純にジャンル化されることを拒み続ける。ナン・ノウィック (Nan Nowick) は、そのようなアードリックの位置づけを次の

ように試みている。

I [Nan Nowick] believe that, paradoxically, it is through writing about Native Americans that she will escape what she considers the danger of being labeled (and thus limited or dismissed) as an ethnic or a minority writer. It is in writing about a minority that she will gain acknowledgement as a mainstream American writer of unusual talent, one who specializes in a hybrid genre, fiction with the intensity and lyricism of poetry, short story sequences that transcend themselves to become novels. (Chavkin, *Conversations* 74)

アードリックが先住民の血を引いていることや女性であること等、作家としての彼女の個人的な条件が作品に影響を与えるのは当然である。しかし、それらは、特色であって、作品の内容を決定する本質ではない。将来的にアードリックは、「アメリカ先住民」、或いは「女性」という限定さえなしで、ノウィックが言うように「アメリカの作家」として、その豊饒で複雑な作品世界の真価が認知されることになるのかも知れない。むしろ、そのような動きに向っていくこと、換言すれば、差異を認めながらもすべてを等価なものとして見る価値観の獲得こそが、アメリカが理想として掲げてきた方向だったのではないだろうか。

この論文は、九州アメリカ文学会第56回大会におけるシンポジウム（2010年5月9日）での口頭発表を元に加筆・修正したものである。

註

- 1 ヴィゼナーの場合、活躍を始めた時期は第一波の作家たちと同じであるために、作品の特質とは拘りなく第一波の作家とみなされることもある。また、アレクシーはネイティヴ・アメリカン・ルネサンスの「第二世代」と称されることもある。(Porter 272, 297)
- 2 「北米先住民文学」とは、異なる部族物語の総体であって、各部族物語は部族ごとの特徴がある。ここでは、アードリックが属しているタートル・マウンテン・バンド・オブ・チペワ（オジブワ／オジブウェ）の部族的ナラティヴの特徴と文学的背景や素材としての彼らの近・現代の歴史的体験を、チペワ族の先住民性の要素として見ていくが、同時にその基本的部分は、ほとんどが他の部族物語とも共通するものとして、「汎インディアン

的要素」として解釈するものである。なぜなら、先住民の語りは、オーラル・トラディション、ユーモア、循環的時間概念、部族神話を基盤とする点で共通していて、それを汎インディアンの文学特性と看做することができるからである。また、現代の先住民を描く場合、インディアンを絶滅、あるいは同化政策によって均質化しようとした連邦政府のせいで、保留地での生活、政府のインディアン政策にどう対処するかなどの近似する経験が、文学上の共通のモチーフとして、彼らを結び付けている。さらにそれを表現するに当たっては、始めは強制的に習得させられた英語が共通の言語媒体となっている。よって、本稿での「部族物語」と「先住民の語り」という用語は、互換性の高いものとして文脈上より適した方を適宜、使用する。

3 Chavkin, Jacobs, Wong参照

4 『ポストモダン・アメリカ』における徳永論文の第3節「ジューン——埋められる空白」(316-21)を参照。

参考文献

- Bakhtin, Mikhail. "Discourse Typology in Prose." L. Matejka and K. Pomorska, eds., *Readings in Russian Poetics*. MIT P, 1971.
- Bonetti, Kay et al, eds. *Conversations with American Novelists: The Best Interviews from The Missouri Review and the American Audio Prose Library*. Columbia: U of Missouri P, 1997.
- Castillo, Susan. "Postmodernism, Native American Literature and the Real: The Silko-Erdrich Controversy." *Notes from the Periphery: Marginality in North American and Culture*. New York: Peter Lang, 1995, 170-90.
- Chavkin, Allan, ed. *The Chippewa Landscape of Louise Erdrich*. Tuscaloosa: The U of Alabama P, 1999.
- Chavkin, Allan, and Nancy Feyle Chavkin, eds. *Conversations with Louise Erdrich and Michael Dorris*. Jackson: UP of Mississippi, 1994.
- Childers, Joseph and Gary Hentzi, eds. *The Columbia Dictionary of Modern Literary and Cultural Criticism*. New York: Columbia UP, 1995.
- Kristeva, Julia. "Word, Dialogue and Novel." *The Kristeva Reader*. Ed. Toril Moi. Oxford: Blackwell, 1986.
- Erdrich, Louise. *Love Medicine*. New York: HarperCollins P, 1993; rpt. 1998.
- . *The Beet Queen*. New York: Bantam, 1987.
- Gates, Henry Louis, Jr. *The Signifying Monkey: A Theory of African-American Literary Criticism*. New York: Oxford P, 1988.

- Jacobs, Connie A. *The Novels of Louise Erdrich: Stories of Her People*. New York: Peter Lang, 2001.
- Krupat, Arnold. *The Turn to the Native*. Lincoln: U of Nebraska P, 1996.
- Larson, Charles R. *American Indian Fiction*. Albuquerque: U of New Mexico P, 1978.
- Lundquist, Suzanne Evertsens. *Native American Literatures: An Introduction*. New York: The Continuum International Publishing Group, 2004.
- Owens, Louis. *Other Destinies: Understanding the American Indian Novel*. Norman: U of Oklahoma P, 1992.
- . *Mixedblood Messages: Literature, Film, Family, Place*. Norman: U of Oklahoma P, 1998.
- Porter, Joy and Kenneth M. Roemer, eds. *The Cambridge Companion to Native American Literature*. New York: Cambridge UP, 2005.
- Pulitano, Elvira. *Toward a Native American Critical Theory*. London: U of Nebraska P, 2003.
- Quennet, Fabienne C. *Where 'Indians' Fear to Tread?: A Postmodern Reading of Louise Erdrich's North Dakota Quartet*. Hamburg: LIT, 2001.
- Rosenthal, Caroline. *Narrative Deconstructions of Gender in Works by Audrey Thomas, Daphne Marlatt, and Louise Erdrich*. New York: Camden House, 2003.
- Sarris, Greg, Connie A. Jacobs, and James R. Giles, eds. *Approaches to Teaching the Works of Louise Erdrich*. New York: MLA, 2004.
- Scott, Steven D. *The Gamefulness of American Postmodernism: John Barth & Louise Erdrich*. New York: Peter Lang, 2000.
- Showalter, Elaine. "Feminist Criticism in the Wilderness." Elaine Showalter, ed. *The New Feminist Criticism*. New York: Pantheon, 1985.
- Silko, Leslie Marmon. "Here's an Odd Artifact for the Fairy-Tale Shelf." *Studies in American Literature*, Vol. 10, 1986: 177-84.
- Vizenor, Gerald. *Narrative Chance: Postmodern Discourse on Native American Indian Literature*. Norman: U of Oklahoma P, 1993.
- Wong, Hertha D. Sweet, ed. *Louise Erdrich's Love Medicine: A Casebook*. New York: Oxford UP, 2000.
- 徳永紀美子「ルイズ・アードリック『ラブ・メディソン』——文化的アイデンティティを巡る物語として」『ポストモダン・アメリカ——1980年代のアメリカ小説』安河内英光・馬場弘利編著 開文社、2009年、308-334頁。
- バルト、ロラン『物語の構造分析』花輪光訳 みすず書房、1997年。